「根源悪」について
― 原罪と宿業 ―

薗　田　　坦

「根源悪」の問題，あるいは根源的な「罪」という問題は，人間存在の根本に関わる事柄として，洋の東西を問わず古くから多くの宗教家や哲学者によって取り上げられ，深い考察が向けられてきた．ここではとくにキリスト教における「原罪」という考えと，また仏教で言われる「宿業」という思想を念頭に置きながら，それらに共通して見られる人間存在にとっての根本的な問題点を取り出し，より哲学的な観点から解明してみたい．その際，手がかりとして主に取り上げるのは，カントにおけるいわゆる「根源悪」という概念であるが，そこに含まれている問題の考察を通じて，できれば現代人における宗教の課題という点にまで論及するように試みてみたい．

キーワード：原罪，宿業，人間における悪の問題

序

「根源悪について」という標題を掲げたが[1]，この「根源悪」という概念そのものは，カントのいわゆる『宗教論』[2]に見られる思想（概念）“das radikale Böse”の訳語であり，もちろんここでもさしあたってそれを念頭において用いているが，事柄としては，人間存在の根本に関わる，根源的な意味での悪の問題，または罪の問題として，人間にとっていわゆる宗教というものが成立してくる場面，あるいは少なくとも宗教ということが問題となり，宗教的要求というべきものが生じてくる境位において，（いわゆる死の問題，あるいは生死という問題とともに），古くから多くの宗教家や哲学者によって取り上げられ，さまざまに考えられてきた事態であることは言うまでもない．罪とか悪という問題は，人間にとっての本性的な罪のさが，罪深さ，あるいは罪性ということに気づかれ，人間が自ら根源的に罪を負った（咎を負った，schuldigな）存在であるという自覚に到るとき，本来的な意味において現われてくる．そのとき人間は，ちょうど死という事態において，人間の存在そのものを否定するような徹底的な無に直面するのと同じように，人格存在としての人間の存立が脅かされ，（もちろん死の場合のように，人間の自然的身体的な存在そのものが否定に曝され，無くなるということではなくとも），もはや人間として生きていくことが困難になるというような絶望に陥り，その意味でやはり人間としての存立を根本的に不可能にし，否定するような無に直面させられるということが起こり得るのである．死の問題に関して，ハイデッガーが「無への不安」ということを語ったのと同様に，罪や悪の根源的な自覚と結びついても，人間には「無への不安，あるいは絶望」ということが生じ得るわけである．

あるいは場合によっては，罪（悪）の問題は，死の問題以上に，人間にとってより切実な，あるいはより根源的なこととして見られることもある．例えばキリスト教においては，罪という問

題は，人間にとってより本質的で，切迫した（切実な）事柄として考えられている一面があり，そのような人間の根源的な罪深さ（罪性）の帰結として，例えば「罪によって死が入り込んだ」（ローマの信徒への手紙，5-12）とも言われている．ここでは死が人間の罪の結果であり，いわば罪からの当然の報いとして死が生ずる，と受け取られている．要するに，人間の罪性ということ，その罪の贖い（贖罪）ということが根本問題となっているところに，キリスト教という宗教の一つの特徴が見て取られるであろう．

これとの対比で言えば，仏教の場合は，どちらかと言えば死の問題，いわゆる生死という事態がその宗教の成立のより根本的な契機になっていると（とりあえず）言うことができるであろう．もちろんそのことは，仏教全般において罪性とか根源的な罪深さということがまったく問題にされていないということでは決してなく，仏教においても当然のことながら，人間の罪性や悪性についての深い反省や自覚が見られ，いわゆる罪業とか宿業，あるいは罪悪深重や煩悩熾盛といった深い自覚が表明されていることは改めて言うまでもない．（実は，仏教におけるそのような深い罪の自覚という問題を，いわゆる根源悪という観点から，いわばキリスト教とパラレルに，同じ深さの次元から捉えてみるということ，あるいはその必要があるのではないかということが，本論文の一つの狙いというか，意図するところでもある）．それにしても，仏教においては（もう一度繰り返すなら），より根源的なのは，やはり生死の問題，つまり死すべき存在としての人間の有限性ということへの根本的な自覚であり，罪業ということも，そのような人間の有限性から，あるいは仏教の概念で言えば，いわゆる無明（人間存在に本質的な無知）や煩悩（同じく人間存在に根本的な迷い）ということから捉えられ，その無明や煩悩のうちにあること（つまりは，いまだ真実の知に目覚めていないこと）が，そのまま根源的な意味での罪であると考えられているように思われる．

それはさておき，問題はここで，そのような根源的な罪や悪，あるいは罪深さや罪性の自覚というものが，どのようなものとして考えられ，またどこから，いかにして生じてくると見られるかということである．別の言い方をすれば，人間にとって宗教というものが成立し，問題となってくるという場合，そこでは罪とか悪ということはどのような仕方で，またいかなる次元で（いかなる深みにおいて）問題となってくるのかということである．

1．

人間において，自己自身の根源的な罪性（罪のさが）とか，人間に本性的な罪深さといったものが自覚されてくる場合，さしあたって現実には，それは何か一つの罪を犯すとか，ある具体的な悪を行ったということを，いわばきっかけとして生じてくるものである．あるいは少なくともそのようなことを幾度か繰り返すとか，またはそれが癖になるということを通じて，そこからこのような自覚や反省へと次第に深まって行くというのが，恐らく通例であろう．そしてそれは，ある時点で決定的な仕方で，あるいは飛躍的に，ある根本的な洞察に到達することになり，自己自身の，あるいは人間そのものの本質的な罪性への知見や自覚に到るわけである（むろん，いつでも誰でもがそこに到るということでは決してない）．そのとき人間は，もはや単にあれこれの罪を犯したとか，悪い癖が身についたといったことにとどまらず，自己のあり方全体への反省として，いわば人間存在（自己存在）そのものに関わる罪深さ，あるいは人間の本性的な罪性を自覚し，反省するに到るのである．ここでは，もはや個々の罪や悪にとどまらず，いわば罪の全体，

あるいは罪そのものが問題となり，しかもそれがいわば自己自身の存在と一つになって自覚されてくる．時にはまたそれは，もはや現実に罪を犯すか犯さないかの以前の問題として，自己自身が根源的かつ本性的に罪を負っている（従っていつなんどきでも罪を犯し得るし，また犯さざるをえない）という負い目や罪責の自覚として現われてくるのである．

古来，いわゆる原罪（キリスト教）とか，また恐らく仏教で言われる宿業とか罪業深重という言葉，あるいはもう少し哲学的には「根源悪」という概念によって把握され，問題にされてきたのは，まさにこのような事態であると考えられる．

例えば，キリスト教における原罪（original sin）というのは，人間存在のorigin（つまり起源とか根源）において負わされた罪（罪深さ），あるいは人間が人間としてあるそのoriginからもっている，ないしはそのoriginに結びついた，またはそのoriginに関わるものとしての罪（罪深さ）を示そうとしていると考えられる．周知のように，キリスト教では，このような原罪は『旧約聖書』のなかで一つの物語として，いわば神話的に語られているが，そこには深い意味が含まれている．聖書の物語（「創世記」）では，アダムという第一の人間（人間のprototype原型であり，いわば人間の最初のorigin起源でもある）の堕罪，つまり罪を犯したということによって，人類のうちに罪が入り込んだとされている．アダムは，エバとともに，神の命令に背いて，禁じられていたリンゴを食べたというのがそれである．その場合，神の命令とは「……すべからず」という，いわば道徳的な命令であるが，この命令を犯すことによって，最初の罪が行われる（あるいはそもそも罪ということが初めて生じる）とともに，罪が人類のうちに入り込み，罪性（罪のさが）が人類全体のうちにいわば備えつけられることになった，と見られるのである．それは道徳的な罪であると同時に，（神の命令に背いた限りで）宗教的な罪でもある．聖書では「一人の人によって，罪が世に入った」（ローマの信徒への手紙，5-12）と言われ，それ以後のすべての人間は罪性を負うことになったとされるわけである．

因みに言えば，アダムがリンゴ（それは知恵の実とされる）を食べたことによって，同時に人間が知恵に目覚めたとされ，それゆえまた人間が恥を知るようになったということが言われている．アダムとエバは，自分たちが裸でいることを知り，互いに恥ずかしさを知ったということは，西洋の絵画におけるテーマ（いわゆる楽園追放のテーマ）として繰り返し取り扱われてきた．つまり堕罪あるいは罪性を負うということが，ここでは人間が知性的ないしは自覚的な（恥を知る）存在になるということと同じところから，一つに結びついた事柄として捉えられている．この意味をも含めて，人間が知性的・自覚的人間となるという，その人間存在のorigin（根源）に関わる事柄として，罪の問題が捉えられているということである．言いかえれば，原罪はここで，最初の人間におけるという，時間的な意味での罪の起源（始源origin）の意味でoriginal sin（原罪）であるのみならず，人間が人間（知性的・自覚的存在）となるという人間存在の根源（origin）に関わるという意味でもoriginal sin である．そしてこのような二重の意味を含めて，アダム以後のすべての人間はこのような原罪を受け継ぎ，いわば相続している（それゆえドイツ語では，原罪をErbsünde，つまりすべての人間がerbenしている，相続し負い続けている罪と言う）とみなされる．

このようにキリスト教的な人間理解では，罪の問題，罪の自覚ということが人間存在の根本に結びつく事柄として考えられているのであって，先に言ったように，キリスト教という宗教では，罪（あるいは悪）という問題は，いわゆる死の問題以上に，根源的（中心的）な問題と考えられているということは，ここからも見て取られ得るであろう．

しかしまた仏教においても，このような罪（あるいは罪性）の根源的な自覚や反省は，決して見られないわけではない，と私には思われる．今その詳細を論ずることはできないが，例えば仏教において古くから罪業とか宿業，あるいは罪悪深重というような自覚や反省が語り出されるとき，事柄は同じような深さの次元から捉えられていると考えられよう．例えば宿業ということが語られるとき，通俗的にそれは前世や来世に関連づけて，いわゆる（キリスト教におけるような）神話的な物語ではなく，むしろ説話的，あるいは単なる伝承的な事柄と結びつけて受け取られており，まさにその点がしばしば問題（つまり何か曖昧な，あるいは徹底されない考え）であるように言われたり，見られているようであるが，私には必ずしもそのようには思われないのである．しかしこの点については，後ほどもう一度触れることにしたい．

2.

ところで，このようなキリスト教において神話的な表象のもとで捉えられている原罪という問題がもう少し哲学的な次元で考察されるとき，それはいわゆる「根源悪」とか，広く哲学的に「悪の問題」として考えられる．その問題はすでに古くから多くの人々によって取り上げられてきたが，比較的新しい時代（近代）では，冒頭にも挙げたようにカントという哲学者が，根源悪（das radikale Böse）という概念によって，（それは彼の晩年の著作であるいわゆる『宗教論』1793と呼ばれる著作の第Ⅰ部[3]のなかで）主題的に取り上げられ非常に深く考察されている．しばらくその思想内容を見てみよう．

カントにおいても，ここで人間の根源的・本性的な罪とか悪ということが問題にされるのであるが，その場合この根源的ということ，つまりradikalということは，（通常は徹底的な，あるいは過激なという意味で理解されているが）文字通りradix（根）に関わる，植物で言えば，いわば地上に現われていない根の部分に関わる事柄として把握されている．言いかえれば，人間が人間として存立している，いわばその根にまつわる所で，つまり現実の人間の目に見える部分ではないが，その人間を成り立たしめている根拠とか，根元というべきところで，人間の悪性や罪性が問われているということである．そのようなものとして，例えば彼はこの根源悪を「人間の本性的自然（Natur）のうちに悪の原理が内住（einwohnen，あるいは内在）していること」[4]と表現する．このein-wohnenという語は，もともと内に住み込む，入り込むという意味であって，悪の原理が人間の本性（自然）のうちへ入り込み，内に住んでいるというニュアンスを示している．つまりそれは，単に人間が個々の罪を犯したり，悪を行うことによって，いわば外から（あるいはあとから）その人間に付着したり，付け加わったものではなく，むしろ人間にとって本性的に（自然的に）もともと内住ないし内在しているということである．その意味でそれは，まさにradikalに，つまり土のなかの根にまで食い込んだ深みにおいて捉えられているのである[5]．

因みに言えば，このような内に食い込むとか，根にかかわるといった感覚は，例えば仏教で宿業とか，宿縁という場合の，宿という言葉のうちにも含まれているように思われ，ただ表面的に付け加わった，いわば偶然的なものではないという，どこか似たニュアンスが示唆されていると言い得るのではなかろうか[6]．ただしこの点はもう少し詳しい考証を必要とするであろう．

それはともかく，カントの根源悪の思想は，先にも言ったように，キリスト教における原罪（original sin）ということの意味を解釈し，聖書のなかで神話的な表象で語られていたものの，その意義を哲学的に解明せんとしたものであって，その限り一種の非神話化の試みであったとも

言えるであろう．つまり彼はそこで，そのoriginalという，時間的な意味での始源origin とともに，人間の根源originに関わるという意味を，哲学的に人間そのものの本性Natur，あるいは人間存在の根拠ないし根源に関わる（根に関わる）こととして，radikalに解明しようとしたわけである．

ここからカントの，根源悪をめぐる独自な，しかもきわめて深く考えられた思想が，緻密にかつねばり強く展開されていくが，今はその詳細を述べることはできないので，とくに二つの点に絞って，カントの思想の独自性をよく示していると思われる問題についてのみ，簡単に触れておきたい．

その一つは，今見たように根源悪は，人間の本性的自然のうちに内住し，人間存在の根拠ないし根源をなすものであるが，それ自体として取り出すことも捉えることもできないのであるとすれば，われわれはどのようにしてそれを自覚するのか．そしてそのような根源悪の自覚に至る筋道はどのように考えられ，またその自覚の構造はいかなるものとみなされるであろうか，という点に関してである．

カントはここで，この事態を具体的に把握するために，根源悪を人間のうちにひそむ「悪への傾き」（Hang zum Bösen），あるいは悪への本性的な傾向という意味での「悪への性向」として，象徴的に捉える[7]．このような傾きは，またpropensio（Propensity）とも言われているが，それは人間がいまだ実際に（目に見える仕方で）悪を行っているとか，悪に傾いているということがなくとも，すべての人間があらかじめ（pro-，前もって）本性的にもち，人間本性のうちにいわば可能的に含まれているような傾きであり，もろもろの悪や罪，また悪しき習慣や性癖が生ずる，いわばその可能性の根拠とみなされるものである．

われわれは通常，例えばある人間が悪や罪を犯し，またそこから悪い習慣や癖をもっている場合，そのようないわば目に見える傾向性（Neigung，つまりはっきりとした悪への傾きInclination）をもっている人を，悪人だとか悪癖のある人だと言う．しかしカントによれば，そのような悪業や悪癖がその人の傾向性として現われてくるのは，その根本にいわばそれらを成り立たしめる根拠として，それに先だつ本性的な傾き，つまりPropensityとしての傾き，あるいは「悪への性向」があったからだと考えられる．すべての人間のうちには，そのような本性的な傾きは配置され，含まれている（Prädisposition，いわば前置的に配置されている）のであって，それがあるからこそ，そこから，それに基づいて，もろもろの悪行（罪の行為）や習慣的な悪癖は出てくるのであると考えられる．本性的な傾き，つまり「悪への性向」は，それ自体として見ることも捉えることも，あるいはそれに気付くこともできないが，そこから，それに基づいて悪行や悪癖が生じ，それがその人の傾向性となることによって，それを可能ならしめる根拠として，性向（Hang）というものがあらかじめあったことに気付かされ，自らの根源悪を自覚することになるのである．

もちろん，すべての人間にこのような本性的な傾き（性向）があるゆえに，すべての人間が悪への傾向性を現わし，従って悪人となり，悪癖をもつというわけではない．かりに，まったく悪をなさず，悪癖をもつことのない人があれば（そのようなことは現実にはおよそ考えられないが），その人においては悪への本性的な傾き（性向）は自覚されることもなく，そもそもそのような傾きすらも存在しないと言えるかもしれない．しかし人間がひとたび悪へと踏み切り，そこから習慣的な悪（つまり悪への傾向性）を身に帯びるに到るとき，それらを可能にするものとして，先天的・本性的な傾きとしての根源悪が自覚され，またそれは自らにもどうしようもないものとして顕わになってくるのである．（カントはこれを，未開人が酒やたばこの味をいったん覚えると，

それに惑溺していくという傾向が見られるという，おそらく当時の報告を例に挙げてこれを説明している).[8)]

以上のような解明のなかに，カントにおける，人間のいわゆる根源悪と言われる事態が気付かれ，自覚される場合の，その自覚の構造というか，それに到る筋道が，巧みに捉えられていると言うことができる．と同時に，ここに根源悪という事柄の本質ないしは独自なあり方が非常によく示されていると言える．例えば，卑近な例としてよく新聞の投書欄などで見られるが，ある主婦が，スーパーなどで何かある盗みを働いてしまったが（それはたまたま，いわば出来心で，ということであれ），それによって彼女のなかにあらかじめ含まれていた（あるいは前もって置かれていた）本性的な（盗みへの）傾きが，彼女自身のうちに開き示され，自覚されてくることになる．そしてそのゆえに，私はこれからも繰り返し盗みを働き続けるのではないか，いわばその方向へと決定されてしまっているのではないかという不安が，彼女を脅かし続けている，といった投書などが見られる．そのとき彼女は，その盗みを働いてしまったことの恐ろしさを告白し，反省しているのであるが，彼女が真に苦しみ，その不安に脅かされているのは，その根源に隠されている本性的な（悪）への傾きであり，そのことへの自覚なのである．

このような場合，いったんそのような根源的な悪への傾き（性向）が私自身のうちに気付かれ，見出されるとき，それはいわば私の全存在を揺るがすような，決定的な意味をもってくる．あるいはまた一つの行為が，私自身のうちにあって突如，根源悪という，いわば私の存在全体に関わるものを開示し，大写しにしてくることになる．そのときそれは，私自身を根本的な不安に陥らせ，私自身の人格や存在の全体を捉え直さねばならないという状況に置くことになる．人間はそのとき，いわばその本性から悪として，つまり“von Natur böse”として見られてくることになる．それは「私はねっからの悪人，本質的に罪深い，咎を負った者ではないか」という自覚であり，反省となる．このような仕方での悪（つまり根源悪）の自覚は，すでに宗教的な次元の問題なのである．カントの理解は，このような根源悪が人間にとってどのように自覚されてくるかという，その自覚の構造と特質を非常によく捉え，その本質的な意味を深く考えたという点で，きわめて重要なものである，と言うことができるであろう．

3.

以上のように，カントにおいて，人間の根源的な悪性（あるいは罪性）は，人間存在の根源ないし根拠にまで食い込んだもの，あるいはそこに結びついたものとして見られ，その意味で「人間は本性（自然）から悪である」(Der Mensch ist von Natur böse)[9)] と言われる程に，きわめて深く捉えられ，また徹底して自覚されている．しかしながら，カントの場合，実はこのことから一つのきわめて重要な問題が生じ，あるいは非常に難しい（厄介な）事態が現われることになる．そしてこれが，先に述べたように，カントの根源悪の思想における独自な，また意義深いものとしてここで取り上げたい第二の点に関わる問題である．これについても簡単に触れておきたい．

さしあたって，ここでの問題をごく単純化して言えば，こういうことになる．すなわち，もしも人間がそのように本性的に悪であり，いわば生まれつき悪への傾きをもっているのであるならば，これは生まれてきた人間自身にとってどうにもならないことではないか．かりに悪を行っても，もともと本性的にその可能性をもって生まれてきているのだから，仕方がないではないか，という考えも成り立つことになるからである．そこからさらには，かりにどんなことをしても，

もともと人間は「悪への性向」をもって生まれついてきているのだからという，一種の決定論（Determinismus）あるいは宿命論（Fatalismus）的な考えに陥ることになりかねない．それは，どうせ人間は悪なのだからという開き直りに通じるものとなる．そしてそうなれば，人間が悪を行い，罪を犯しても，それはいわば人間の自然本性的な欠陥からであるということになり，その本人に帰責する（責任を帰する）ということもできなくなる．あるいはもはや，それは悪だとも言えなくなってくるであろう．

そればかりかさらに，かりにそのような決定論的な，あるいはいわば自然必然的な悪への傾きということを認め，押し進めるとすれば，そもそもいわゆる「道徳の立場」というもの自体が成り立たなくなってくる．カントにとっての厄介な（難しい）問題というのも，この点に関わっているのである．

今は詳しく述べることは省略せざるを得ないが，周知のようにカント自身が確立し，根拠づけた「道徳の立場」は，一口に言って，どこまでも人間の自由，あるいは人間的意志の自発性のうえに成り立つものである．人間は「自由に行為する存在者」[10] であって，しかもその自由・自発性は，自らの行為の原理を自らの内から生み出し，それに従って行為するものであり，その意味で自由は，いわゆる自律（Autonomie, 自分で，自分の内から自分を律する）ということである．言いかえれば，それは決して他から命じられたり，与えられたり，また決定されるものではないのである．道徳の問題で言えば，人間の理性がそれ自身の内から道徳の原理を打ち建て，つまり具体的に言えば，いわゆる道徳法則（善の原理）を生み出し，それに従って行為することである．

これが，カントの打ち建てた近代的人間の理念であり，また近代的な人間理解からの根本的な要請である．ところが，先から述べているように，カントはその晩年になって，人間の根源的な悪性（罪性）を認め，いわばその悪の原理（根源悪）を人間存在の深みから解明せんとしたのである．先の注３）に挙げた『宗教論』第一部の標題は，このことを示している．一方では，善の原理あるいは人間的自由（つまり道徳の立場）というものをどこまでも確保し，堅持しながら，しかも同時に同じ人間のうちに根源的な悪性を，つまり悪の原理を人間本性のうちから抉り出し，しかも単なる決定論や宿命論に陥ることのないようにする．これをどのように考え，いかに両立せしめるのかという所に，まさにカントの苦慮した点があり，さらにはカント以降の，近代から現代にかけて思想家たちが，人間における根源的な悪の問題を考えようとした場合に（z.B. SchellingやKierkegaardが）苦慮した問題があったのである．（それはより一般化して言えば，いわゆる自由と必然，あるいは自由と自然という哲学の根本問題にも関わるが，今はこれ以上立ち入ることは避ける）．

では，カントはこれをいかに考え，解決したのか．紙面の都合もあり，詳細を論ずることはできないので，結論的なことだけをごく簡単に纏めて言うならば[11]，カントは，先に見たように「根源悪」（悪への本性的な傾き，性向）というものを，もって生まれた（angeboren）なものと言わざるを得ない，と一方では言う．けれどもまた他方では，それは単に生まれつき人間に備わった性質ないし資質（Beschaffenheit）のようなものと考えられない，とも言う．（根源悪は，あくまでも本性的な傾き，性向であって，具体的な傾向性や性質とは異なるのである）．と言うのも，もしも根源悪（悪への本性的傾き）が，生まれつきの性質ないし状態のようなものと考えられるならば，人間のうちに，善を行い得る自由ということが考えられなくなり，およそ善への自由（つまりは道徳の立場）が成り立たなくなってしまうからである．

カントは，そのようには考えることはできない．では彼はどう考えたのかと言えば，人間が

自由意志をもち，善をなし得る存在である限り（ということは，また悪をもなし得る存在であることでもあるが），根源悪，つまり「悪への本性的傾き」もまた，単に人間に先天的に賦与された性質ないし状態のようなものではなく，人間が自らそれを行った，ないしは自ら選び取ったものでなければならない，と考えるのである．つまり根源悪（悪への性向）もまた，単なる性質（Beschaffenheit）ではなく，行為（Tat）である，つまり人間が自ら選び取った行為である，と見られるのである．むろんそのTatは，すべての経験的な行為，つまり時間的，現象的な世界におけるもろもろの行為（Handlungen）と同じレベルのものではない．なぜなら，このTatは，一切の経験的，現象的世界における諸行為に先立ち，いわばそれらを可能ならしめる（現実の悪や罪は，それに基づいて，そこから生じてくる）ものだからであり，従って現象界における経験的な行為ではない．その意味でカントは，この行為（Tat）を，感覚的・可感的な世界におけるsensibleな行為と区別して，英知的行為，すなわち経験的世界に先立ち，それを可能にするものとして考えられねばならない世界（これをカントは英知界，あるいは可感界に対して可想界と名づける）における行為という意味で英知的行（intelligible Tat）と呼ぶのである．

英知的行とか，英知的世界といったことは，いわばカント哲学の独自な考えに基づくものであり，非常に分かりにくい，とりわけ今日では，理解の困難な概念であると思われる．しかし，ことが人間や世界の根本的な問題，あるいはその本質的な根拠や原理を問うということである限り，とりわけ例えば根源悪の問題というような，人間存在の根本あるいは究極的な根拠に関わるような事柄を探るという場合には，そのような思想や世界を思考することも可能であり，また不可欠であるように，私には思われる．カントの場合，（もう一度まとめて言えば）根源悪という問題は，このような思考を通じて，人間的自然のうちに本性的に与えられたものとして（いわば，もって生まれたangeborenと言わざるを得ないような根深さから）捉えられながら，しかもそれはどこまでも自らが取った，ないしは引き寄せたものzugezogenesと見られざるを得ないという，きわめて深く考えられた理解にもたらされており，そこに彼の主体的・実存的な思考性格が示されている．その意味からもこの思想の重要性は，今日でもなお決して失われていないと思われるのである．

4.

以上，少々長くなったが，カントの「根源悪」という思想について，これをキリスト教における伝統的な「原罪」という考えの，一つの哲学的解明ないし解釈という観点から，とくに特徴的と見られる二つの点に焦点を合わせて考察してみた．ここには原罪という，もともと神話的な物語として，いわば古めかしい素朴な形で語られているもののなかに含まれている真理契機というか，深層ないし真相というべきものが，このような哲学的解釈を通じて，いわば浮かび上がらせられている，と言うことができよう．[12] もちろん，このような解釈が唯一のものでも，絶対のものでもなく，他にもさまざまな理解がなされ得るし，また必要であることは言うまでもないが，以上に取り上げた点にも，人間における根源的な悪（罪性）といった問題の理解に大きな示唆を与えるものが見出され得るであろう．

同じように，仏教における宿業や罪業という考え，あるいは罪悪深重という表現で言い表されている根源的な罪や悪の自覚や反省といった事態に関しても，それらのうちに含まれている真理ないしその真相，あるいはそれらのもつ深層的な意味は，さらに深く探求され得るし，またされ

ねばならないのではないか，と考えられる．副題に「原罪と宿業」という言葉を並べて掲げておきながら，仏教における罪業や宿業の観念，あるいは罪悪深重・煩悩熾盛という場合の，その自覚のあり方というようなことについて，立ち入って述べることはできなかった．というよりも，現在の私には，それを詳述するだけの仏教についての十分な理解や準備もないので，省略させて頂く他はないが，ただ両概念を並記して掲げたということのうちには，少なくとも仏教的な宿業観というようなものや，罪悪深重といった深刻な自覚のうちにも，キリスト教における原罪の思想と同じレベルにおける，あるいは同等の深さから捉えられた人間理解や，いわゆる悪の問題という根本的な事柄に対する洞察が含まれており，あるいは場合によっては，それらはキリスト教における以上の深さや深刻さを表明しているとも推察されよう．そしてその意味で，カントが根源悪という思想によって哲学的に洞察し，解明したようなことが仏教の考え方についても必要であり，また可能であるのではないか，ということが念頭にあったからである．

一般に，仏教の宿業観とか罪業観というと，何か前近代的な，あるいは古代インド的な因習を引き摺った悪しき宿命論に陥る考えだとみなされ，いわば仏教思想における「つまずきの石」のように受け取られがちのように見られる（これは，著名な知識人と言えるような人々の考えにも時々見られるし，また仏教者の内部にもそのような傾向から，問題を回避するような風潮があるように思われる）．しかし，仏教における宿業とか宿縁という考えも，また人間の行為や行動を前世や来世との連関で，従ってそこに，いわゆる輪廻というような考えをも含めて捉える業（ごう）というような思想も，ただ単に前近代的ないし非科学的な因果論のようなものを考えているのでも，従ってまた決して単純な宿命論や決定論というようなものを意味しているのではなく，そこにはやはり，人間の行動や広く人間が生きるということへの，より深い，また独自な感覚や感じ方のようなものが含まれているのではないか．（その際，とりわけ仏教における業（ごう）という概念の独自な理解が深く関連しているのではないかと考えられるが，今はその点に立ち入ることはもはやできない）．人間の罪悪深重とか煩悩熾盛という深刻な自覚や反省が表明されるところにも，カントが根源悪という概念を通じて解明したような，人間における悪や罪の問題に対する，より本質的で哲学的な洞察や直観が含まれているのではないか．

例えば，親鸞などが「罪悪深重・煩悩熾盛の凡夫」という自覚を語るとき，それはただ，人間が生まれつき悪人であるということが言われているだけではなく，そのような自覚がどこから，いかにして生じているのかが，十分に考慮されねばならないであろう．そしてそこから，人間の限りない煩悩と（そのもとにある）果てしない無明（罪業）への反省が，逆に，仏の無限なる智慧と光明を浮かび上がらせることにもなるであろう．あるいはまた，仏教一般における宿業や罪業といった考えも，たんに人間のもって生まれた宿命的な性質とか，他人や何らかの他の原因による，自らにはどうにもならないものとして引き受けるといった，ただ受動的・消極的な仕方での自らの罪性の自覚ではなくて，いかなる他のものにも帰責せしめることのできないものを，あえて（前生ないし来生における）自己の行為の帰結として捉え，自らに引き受け負っていく（その意味ではカントの英知的行為の考えに相当するものとして考える）という積極的な，つまり単に受動的にとどまらない自覚のあり方として受け取るという見方も可能なのではなかろうか．

いずれにせよ，人間における「根源悪」の問題は，現代人の自己理解ないし自己反省においても，われわれの宗教心の問題と深く結びついているのである．

注

1)　本論文は，平成17年1月18日，筆者の前任校であった龍谷大学における最終講義として行った講義原稿に部分的に加筆，訂正したものであることを断っておきたい.

2)　一般に，カントの『宗教論』と略称される著作の，正確な名称は『単なる理性の限界内における宗教』(Immanuel Kant, Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft, 1793) であり，カントの晩年に属する著述である.

3)　同書第I部の標題は，「人間的自然における善の原理と悪の原理の内住について，あるいは根源悪について」である．なお以下，同書からの引用は，Kant's gesammelte Schriften (Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften版) .Bd.5により，頁数を示す.

4)　前注参照.

5)　余談ではあるが，筆者が昔ドイツに留学していた時，滞在数ヶ月になった頃から，ドイツ人の友人や知人からよく「もうドイツに住み慣れましたか」と問われたが，その場合の「住み慣れる」という言葉がsich einwohnen という語であった．つまり「住み慣れる」ということは，ただドイツの国土の表面上に住んでいる (wohnen) というだけではなく，国土の「なかに住み込んでいる」，あるいは「住み付いている」(ein-wohnen) という感じがあって，初めて言い得ることなのであろう．われわれは誰でも，自分の国にはただ住んでいる (wohnen) のではなく，暗黙のうちに「住み込み」，「住み慣れている」(ein-wohnenしている) わけである.

6)　宿という文字を使った言葉には，他にも宿痾，宿世，宿縁，宿根などが知られているが，いずれにせよ，宿の意味は，根深い，従ってまた久しいという感じであろう.

7)　I.Kant, op.cit. I-2. S.28

8)　I.Kant, op.cit. I-2 Anmerkung, S.28

9)　I.Kant, op.cit. I-3. S.32

10)　I.Kant, op.cit. I-3.S.35

11)　以下の叙述は，Kantの同書第Ⅰ部３以下 (S.32～53) の思想展開を，ほぼ要約的を述べたものである.

12)　ここで取り上げた，Kant自身における矛盾する問題点の具体的な解明は，以下さらに，同書の第Ⅱ部－第Ⅳ部において独自な仕方で進められるが，本稿ではそれには一切立ち入らないことにする.